

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、一本の民族ドキュメンタリー・フィルムを見た。アフリカのどこかの村の暮らしを淡々と撮影したもので、内容はよく覚えていないのだが、最後の場面がとても印象に残っている。

それは夕暮れどき、二人の男が村はずれであいさつを交わす場面だった。二人は別々の村に暮らしていて、ずいぶん久しぶりに再会したらしかった。夕闇を背景に立つ二人は、淡々とこんな会話を交わす。

「おまえはやって来た。」

「そう、おれはやって来た。」

「そうだ、おまえはやって来た。」

「そのとおり、おれはやって来た、おまえに会いにやって来た。」

「おまえは元気そうだ。」

「そう、おれは元気だ。元気でここにやって来た。元気でおまえに会いにやって来た。」

「村では変わりはないか。」

「ああ、変わりはない。いつものとおりだ。」

「いつものとおりか。変わりはないのだな。」

「変わりはしない。××族のやつらはウシを盗みにやって来るし、△△のところにはまた子どもが生まれ、怠け者の○○は女房に尻を叩かれてる……。」

「そうか、いつものとおりか。」

「ああ、いつものとおりだ。」

「おまえは来た。」

「ああ、おれはやって来た……。」

二人は同じようなやりとりをいつまでもくりかえし、会話はとくに発展することもない。民族誌映画なので演出があるわけでもない。けれども、夕闇を背景に二つの黒い影が交わす会話を聞いていて、思わず涙ぐみそうになった。どうして、そんな気持ちになったのか、自分でもうまく説明できない。相手がそこにいること、そして自分がここにいることを、くりかえし確かめるようなやりとりに、自分の生活に欠けている存在の確かさのようなものを感じたからかもしれない。

けれども、実際にアフリカを旅していると、長いあいさつは、かえって面倒だった。こっちは急いでいるのに、長い儀式ばつたあいさつがつづいたり、ほとんどなんの情報も含まれていないやりとりをつづけなくてはならなかったりするのには、ときには苦痛だった。質問をしてもストリートな答えが返ってくることはめつたになく、ヒントのずれたやりとりをつづけたあげく、結局、知りたいことはわからない、時間はむだになる、ということが重なるたびに、がつくりさせられたものだ。

しかし、エジプトで暮らしているうちに、あいさつとは、いわばキャッチボールのようなものだ気づいた。エジプトでは朝のあいさつは、「サバーフルヘイル(よい朝を)」、「サバーフヌール(光の朝を)」というかけあいである。しかし、ときには「バラの花の朝を」、「ジャスミンの朝を」、「マメの花の朝を」といふふうには、互いに花の名前を交互にくりかえすというパターンもある。

ここでは情報の交換に意味があるのではない。言葉を投げっては受け取り、また投げ返す、その時間の中に、コミュニケーションの回路ができてゆくのを楽しんでいるのだ。

具体的な情報のやりとりとは、いわば互いを利用し合うことである。相手から役に立つ情報を引き出し、その対価として相手が必要とする自分の情報をさした。それは等価交換、いわゆるギブ・アンド・テイクである。

けれども、「あいさつ」はそうではない。エジプトやアフリカの長いあいさつを聞いていて感じたのは、情報のやりとりよりも、互いが同じ場所と時間を共有していることをたしかめあうことのほうが、だいじらしいと思うだった。もちろん、そこには商売がらみのかけひきや腹の探りあいもあるだろう。それでも、直接の話題とは関係のない言葉のキャッチボールをくりかえすことで、なんともいえないまつたりとした空間がそこに広がっていくのはほんとうだ。

この話にはまだ先がある。あるとき、久しぶりに会ったアフリカに暮らす友人がこんなことをいった。「ここでは人がかんとんに死んでしまう。日本では考えられないようなほんの些細な原因で、それまで元気だった人が、まるで枝から葉っぱが落ちるようになっている日突然、亡くなってしまう。」

たしかに、まわりを見まわせば、そこでは死は日常だった。ある家族に子どもたちがいれば、かならずといっていいほど、彼らには亡くなった兄弟や姉妹がいる。きのうまで元気だった人が、風邪や下痢、あるいはちよつとした怪我のような、およそ日本では致命的とは考えられてい

ない原因で、あれよあれよという間に死んでしまうこともある。だから、彼らの死に対する態度は、ある意味できわめてドライである。アフリカの知り合いと話していて、以前よく彼といっしょにづるんでいた相棒の話が出ないので、どうしたのかと思つて訊ねてみると、「ああ、彼は死んだ。」と興味なさそうな短い答えが返つてきたりする。仲が良かったように見えていたのに、そのわりには、なんて無関心な態度なのだろうといぶかしくなるほどである。しかし、それは彼らが薄情なのではなく、じたばたしたところでどうにもならない現実にたいする深い諦念が、死に対してドライな態度をとらせるようになったのかもしれない。

アフリカの医療事情の貧しさもさることながら、ぼくが圧倒されるのは、彼らの日常が置かれている死と隣り合わせの「生」の危うさである。死は彼らのすぐかたわらに立っている。そして、彼らもそのことを知っている。

そんな現実を見るうちに、道はたの靴磨きの少年や、片脚を引きずつて歩く物売りのおやじ、下町の大道芸人などと言葉を交わすたびに、不謹慎かもしれないが、「彼らは来年も生きているのだろうか」という考えがいつも心をよぎるようになった。そして長い間忘れていたあの民族誌映画で見た二人のやりとりの意味が、ようやくしみじみとわかるような気がした。

「おまえはやつて来た。」

「そう、おれはやつて来た。」

「そうだ、おまえはやつて来た。」

「そのとおり、おれはやつて来た、おまえに会いにやつて来た。」

いまになってみれば、この執拗なくりかえしには、互いが元気で会えたことがどれほど奇跡的なことなのかを言祝ぐ気持ちが込められていたことが、痛いほどわかる。

そのことを心から喜び、確かめるために、二人は「おまえはやつて来た。」となんどもくりかえしては、「そう、おれはやつて来た。」と切り返す。

ウシが盗まれるのも「」だし、夫婦げんかも子どもの誕生もやはり「」なのだ。それを確認し合い、ここにこうして生きて相まみえたことを祈るような美しい気持ちがある、そのやりとりにはあふれていたのだ。

(田中真知『美しいをさがす旅にでよう』による)

*注 諦念——あきらめの気持ち。 大道芸人——道ばたなどで通行人を相手に演じてみせる芸人。

言祝ぐ——ことばで祝福する。

問一 ——線部1「苦痛だった」とありますが、筆者がどのように述べるのはなぜですか。理由を答えなさい。

問二 ——線部2「そこでは情報の交換に意味があるのではない」について、次のA・Bの問いに答えなさい。

A 「情報の交換」とありますが、どういふことですか。問題文中から内容をくわしく述べている一文をぬき出し、始めの五字で答えなさい。

B 「情報の交換に意味がない」とすれば、あいさつの意味はどういふところにあると筆者は考えているのですか。問題文中から三十字以内でぬき出しなさい。

問三 ——線部3「彼らの死に対する」ドライである」とありますが、なぜドライにみえるのですか。理由を答えなさい。

問四 ——線部4「互いが元気で」言祝ぐ気持ち」とありますが、そのような気持ちが起こるのはなぜですか。理由を答えなさい。

問五 問題文中の二つのには同じ言葉が入ります。始めの会話の部分から適当な言葉をぬき出して答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子供のころは、しもやけがひどくて手袋が必需品だった。小学校に上がるまでは、母の手編みのミトンをはめていた。甲のところは雪の結晶のモヨウが編み込まれた紺色のミトンで、右手と左手が紐状の鎖編みでつながっていた。

少し大きくなるにつれ、親指とその他の指、二つにしか分かれていないタンジュンな形と、片方だけなくしたりしないための長々とした鎖編みが、子供っぽく感じられるようになった。

だから五本指の、紐でつながっていない手袋を初めてはめた時はうれしかった。これぞ真正正銘の手袋だ、という気がした。しかしおつちよちよの私は、案の定、幾度となく片方をなくした。

大人になってしもやけができなくなると、手袋との縁もほとんど切れてしまった。上品で奇麗な色の革製があれば、と思つてデパートを探してもなかなかいいものに出会えず、結局、コートポケットに手を突っ込んでごまかしていた。

ところが先日、フィレンツェを旅している時、手袋専門店を見つけた。小さな店ながら、三方の壁一面の棚に隙間なく手袋が詰まり、カウンターの向こうには、腰周りがつしりした、ちよつと怖そうな雰囲気Cの女性店主が立っている。カンコウキヤクであふれる通りのにぎわいとは無縁を装うように、店内は薄暗く、しんとしている。

不意に、大人になった自分にふさわしい手袋を長年探していたことを思い出し、勇気を出して中へ入ってみた。「いらつしやいませ」の言葉はなく、店主はただ目くばせするばかりだった。カウンターの真ん中に、丸い小さなクッションが置いてある。ああ、そうか、この上に手を載せるんだな、と私は承知する。

思わず手を載せてみないではいけないクッションなのだ。コロンとしてかわいらしく、たつぷりとしたアツみがあり、古風な花柄で彩られている。今までいったい何人の人がそこへ手を置いたのか、真ん中に小さな窪みができているように見えるが、それも丸い形の中にきれいに馴染んでいる。

そろそろと私はその窪みに手を伸ばす。店主は相変わらず愛想なく、むっつりしている。

「新美南吉のドウワ『手ぶくろを買いに』の子ギツネも、こんな気持ちだったのだろうか。」

ふと私は思った。せつかく片方の手を人間に変えてもらい、間違った方を出してはいけませんよとお母さんに言いふくめられていたのに、お店から漏れてくる光に面食らって、子ギツネはキツネの手を差し出してしまうのだ。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい。」

F シツパイをしでかしたのに、子ギツネは少しもあわてず、人間に向かって礼儀正しく接することができた。

私が店主に向かって言いたいのも、まさに子ギツネのこの台詞だった。

「お願いです。どうか私の手にびつたりの手袋を下さい。」

しかしイタリア語がしゃべれない私は、ただ黙ったままでいるしかない。

「エイト。」

その時、クッションの上の手を見下ろしていた店主が、突然、有無を言わせない、威厳に満ちた口ぶりでセンゲンする。そうして棚の一段から、二十種類くらいの手袋を取り出し、カウンターのの上にどさっと置いた。

私の手の大きさは、どうも8号らしい。手袋は実にさまざまな種類がある。子牛、羊、スエード、手縫い、機械縫い、黒、グリーン、からし、オレンジ……。試してみたい品を指差すと、すかさず店主がところてんを押し出すのに似た木製の細長い道具で、五の指をぐいぐいと開き、手にはめてくれる。あれもこれも、とあまりやり過ぎると店主のご機嫌を損ねるかもしれない。最初はそう思い、恐る恐るといった感じだったが、彼女は全く気にする様子はない。淡々とところてんの棒を扱っただけだ。

途中、少し大きいような気がして、7・5号の棚を指差してみたのだが、店主は首を振り、「エイト。」を繰り返す。きつと何十年も客の手ばかりを見てきたにちがいない店主が、そこまで言うのなら間違いなからうと思ひ、やはり8号の中から探すことにする。

無事、手袋を買えた子ギツネは、「母ちゃん、人間ってちつとも恐くないや。」と報告する。それをはめて暖かくなった両手をパンパンとトクイげにたたいてみせる。

結局、私は赤色の手袋を買った。身につけるもので赤色などかつて買ったことがないのに、なぜかその色を選んでいった。それをはめた時、店主が大きくうなずいたからかもしれない。

「お前には赤が一番似合う。」

エイト、と同じクチヨウで、そう断言しているような気がした。

「イタリア人店主は、ちつとも恐くなかった。」

手袋の入った小さな袋を提げ、一人ヴェッキオ橋を渡りながら、子ギツネのまねをして私はつぶやいてみた。

(小川洋子の文章による)

問一 —— 線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 —— 線部1「小学校に上がるまでは、母の手編みのミトンをはめていた」とありますが、問題文中からわかる「母の手編みのミトン」とはどんな形状のものですか。解答らんの中のその図をかきなさい。もようや色については考えなくてもよいものとします。

問三 —— 線部2「おっちょこちょいの私は、案の定、幾度となく片方をなくした」という表現から、筆者のどのような気持ちがうかがえますか。答えなさい。

問四 —— 線部3「ああ、そうか、この上に手を載せるんだな、と私は承知する」とありますが、クッションの上に手を載せる目的は何だと筆者は理解したのですか。答えなさい。

問五 —— 線部4「間違った方」とは具体的に何のことですか。問題文中からぬき出して答えなさい。

問六 —— 線部5「棚の一段から、二十種類くらいの手袋を取り出し、カウンターの上面にどさっと置いた」とありますが、もしもこの時に店主が発言したとすると、どのようなことを言ったと考えられますか。自分で考えて答えなさい。

問七 —— 線部6「店主は首を振り、『エイト。』を繰り返す」とありますが、ここから店主のどのような気持ちがわかりますか。答えなさい。

三 次の詩は平成七年一月十七日に発生した阪神淡路大震災を題材にしたものです。よく読んで、下の問いに答えなさい。

責任

江口 節

¹「今日、学校あるのかな」

と言つて外へ出た

あの日

²「トランポリンみたいだったよ」

余震がいやで

まだ一人で風呂に入れなかった

二か月後

「おとうさんが抱いてくれたから

こわくなかったけど」

五か月目

「大きく揺れて すぐ止まって

また大きく揺れたんだよね

家が壊れるかと思つた」

やつと自分から話したしたのは

秋

³「こわかつた ものすごくこわかつた」

初めてこわいと言えたのだ

八月もたつて

おとなはもう

地震の話をしなくなっている

小さなものは いつだって

大きな傷口を内側に向けている

当たり前顔で

それが自分の責任だという風に

⁴ひとりで

せつせと赤チンを塗っている

*注 赤チン——かつて傷薬として使われていた水溶液。

問一——線部1「今日、学校あるのかな」と言っていることから、子どものどのようなことがわかりますか。二十五字以内で答えなさい。

問二——線部2「トランポリンみたいだったよ」とは、何がどのような状態であったのですか。二十字以内で答えなさい。

問三——に入る言葉として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア さびしそつに イ うれしそつに ウ きつぱりと
エ ぼつんと オ すらすらと

問四——線部3「初めてこわいと言えたのだ」とありますが、この時の心の状態を表したものと最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 地震の起こった日をあらためてふりかえっている状態。
- イ 自分の気持ちをやっとなおに言えるようになった状態。
- ウ もう地震なんてまっぴらだと地震をいみきらっている状態。
- エ なかなかこわいと言えなかった自分にいや気がさしている状態。
- オ 地震のこわさから早く立ち直る大人はえらいと感心している状態。

問五——線部4「ひとりで／せつせと赤チンを塗っている」とはどういうことを意味していますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 地震で負ったけががなかなか治らないのであせっていること。
- イ 地震で負ったけがを自分の力で治そうとしていること。
- ウ 地震で負ったけがにくじけず自立して生きていこうとしていること。
- エ 地震で負った心の傷を大人と同じやりかたで治そうとしていること。
- オ 地震で負った心の傷を子どもが自分で治そうとしていること。

問六 この詩は六連からなっていますが、第五連までの表現について説明した次の文章のAとBに適する語句を考えて書きなさい。それぞれ十字以内とします。

各連とも始めにAを記し、終わりにBをもってきている。

